

障害ある子も ない子も公園へ

障がいのある子もいない子も、ともに遊べる公園を京都に。医療的ケア児や障害のある子を育てる京都市内の母親たちが、「インクルーシブ公園」の整備を求めて活動を始めた。「公園で多様な立場の人と自然に開かれる環境を作れたら」と願いを込める。

インクルーシブには「包み込む」などの意味があり、障害の有無や年齢にかかわらず誰もが一緒に遊べるのが同公園の特長。車椅子でも上れるすべり台や、体幹が弱くても乗れるブランコ、外への飛び出しを防ぐ囲いなどが設置され、乳幼児や高齢者、妊婦なども訪れやすい。

東京都などでこうした公園が整備されていることを知った母親や教員ら4人が、昨年末に「ミシスターつながるプロジェクト」をスタート。市民向けの勉強会を開いているほか、府や市担当者との面会で必要性を説明したり、改修を要望したりしてきた。

障害や病気のある親子にとって、公園で遊ぶ際の障壁は

京の母親ら 整備求め活動開始

バギーのまま・体包むブランコ

「インクルーシブ公園を未来のスタンダードにしたい」との思いで、活動を続ける山田さん(左)と清水さん

京都市下京区



多い。メンバーの清水千明さん(47) Ⅱ伏見区Ⅱは、次女

(8) が先天性心疾患により人工呼吸器を付けて生活するが、「バギーだと、入り口の車止めで足止めされる。公園に入ることで済まないのが現状」と肩を落とす。

山田麻耶さん(41) Ⅱ同区Ⅱの四男(7) は肢体が不自由で、一般的な公園で遊ぶのは難しい。しかしインクルーシブ遊具のある国営明石海峡公園(兵庫県淡路市)を訪れた際は、体全体を包み込むブ

ランコやバギーのまま上れる遊具で兄弟と遊ぶことができたと。

また発達障害のある子の親は、遊具の順番を待つ際のトラブルなどに悩むケースが多いが、インクルーシブ公園は遊びながら障害を理解する場であるため、これまで「周囲に迷惑をかける」と感じていた人たちが訪れやすくなるという。山田さんは「遊具を整備するだけでなく、心理的な障壁を取り払うソフト面の取り組みも重要」と話す。

3月には府立天津川運動公園の北側区域(城陽市)の基本計画にインクルーシブの考え方が取り入れられるなど、前向きな動きも始まった。清水さんは「将来的には京都市内でも整備を実現したい。子どもたちが楽しく遊ぶ中で、障がいのある人も自然と開かれるような公園ができれば」と力を込めた。

問い合わせは同プロジェクトのホームページから。(森静香)

一緒に遊びながら理解深めて



身体に障害がある子や、うまくブランコに乗れない幼児も楽しめる遊具(昨年3月撮影、兵庫県淡路市・国営明石海峡公園)＝山田さん提供